

Chiba Tech News

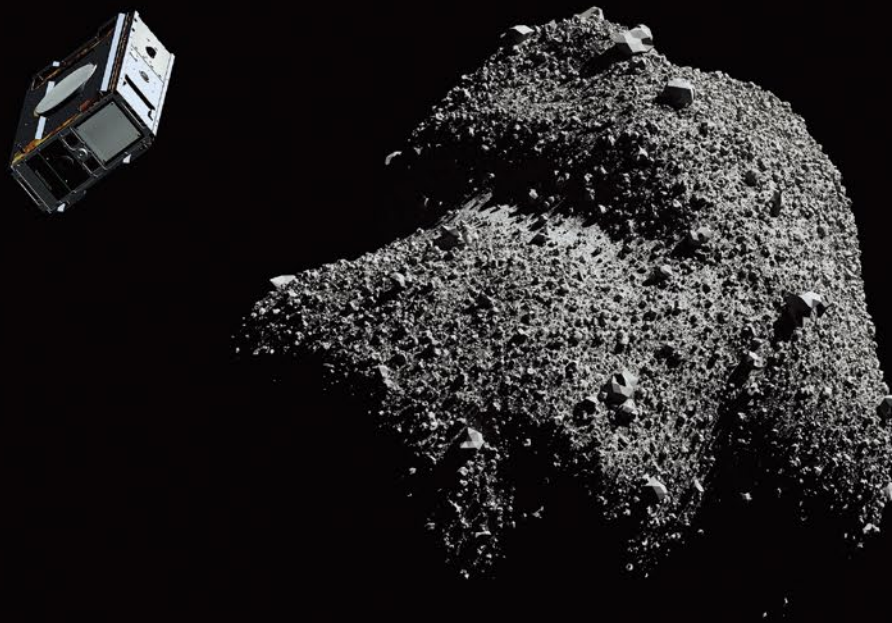
No_707
2026年6月号

千葉工業大学
入試広報部

〒275-0016
千葉県習志野市津田沼2丁目17番1号
TEL 047(478)0222
FAX 047(478)3344



千葉工業大学が地球を守る



挑戦

小惑星アポフィスに着陸する
キューブランダの想像図(CG)
※アポフィスの形状モデルは
Brozović et al. 2018を参考

CG制作 先進工学研究科 未来ロボティクス専攻 鷲尾優作さん 修士1年

[CONTENTS]

- [P2]** 千葉工大の学生が未来の地球を守る日へ
- [P4]** 三菱電機と千葉工業大学が国産フィジカルAIの研究開発に関する基本協定を締結
- [P5]** 令和9年度入試説明会／令和8年度同窓会通常総会
- [P6]** 第60回成田山詣行脚に344名参加
- [P7]** 小澤研究室が参画した宇宙材料研究がNASA年次ハイライトで紹介
- [P8]** 学生たちの実測が支えた受賞・若山尚之教

- 授ら、空気調和・衛生工学会「第40回振興賞技術振興賞」を受賞
- [P9]** 見方が変われば、世界は変わる。『橋をデザインする』が結んだ、八馬智教授の長い旅
- [P10]** 先進工学研究科生命科学専攻・赤城紫音さん博士課程2年、アルツハイマー病の早期発見につながる可能性を示す研究成果がインパクトファクターQ1のScientific Reportsに掲載
- [P12]** 就職・進路支援便り

- [P13]** 受賞／鈴木教授「SX-CRANE」採択／立崎さん「Featured Article および Scilight 選出」／伊藤さん「名和研二賞」／猪股 楓さん「保坂猛賞」／青柳明日華さん「優秀論文賞」／貞末洋佑さん「優秀論文発表賞」
- [P14]** 体育会柔道部 59年ぶりの全日本学生柔道優勝大会で健闘／デジタル版とA4判（見開きA3判）へ移行のお知らせ

千葉工大の学生が 未来の地球を 守る日へ



「プロジェクトアポフィス」に関わる惑星探査研究センター研究員と
高度技術者育成プログラム参加学生

オール千葉工大で挑む、世界初の民間小惑星探査

千葉工業大学惑星探査研究センター（PERC）が主導する世界初の日米産学連携による民間小惑星探査計画「プロジェクト・アポフィス。」探査目標天体は令和11（2029）年4月13日に地球の地表から32,000kmの距離という異例の接近をする小惑星アポフィス。米国ExLabs社が開発する商用宇宙技術実証・科学探査ミッションに本学が開発する観測機器パッケージを搭載する共同計画だ。

そのパッケージにより、地球に接近するアポフィスと地球の同時撮影や、地球接近前後の小惑星の全球マッピング、さらには超小型着陸機「Cube Lander（キューブランダ）」がアポフィスに着陸し調査が行われる。

惑星探査研究センター（PERC）荒井朋子所長は、今回のミッションをこう語る。

「歴史に残るミッションになると思います。新しい時代の民間小惑星探査であり、世界でまだ誰も成し遂げていないことなのです。その意味で、

まず本学は凄いぞ！新しい挑戦を続けてるぞ！ということをお伝えしたいと思っています。そして探査に関わる同業者たちにも。」

この言葉には、宇宙探査は国の機関だけが担うものではなく、これまで宇宙機関や本学独自で様々な宇宙探査の実績を積み上げてきたPERCが自ら構想し、かつ国際協力により民間の力を結集し、学生も主体的にミッションに関わる。その道を拓く新時代の宇宙探査の象徴とするのだという強い決意が満ち溢れていた。さらに「瀬戸熊理事長や伊藤学長をはじめ全学でこの全世界に向けたチャレンジをバックアップしてくださっている。ですから、何としても成功させたいですし、本学の皆さまには誇りに思っていたきたい」とも語った。

背中を見る後輩、応援する卒業生や保護者を含めた、まさにこの挑戦は『オール千葉工大の挑戦』なのである。

地球防衛ミッション サイエンスフィクションを サイエンスファクトに

小惑星アポフィス接近については「この大きさの小惑星が地球にここまで接近するのは、おおよ

そ1,000年に1度なので、千載一遇のチャンスです。今後1,000年は、地球における我々人類の歴史は続いているはずですが、今回地球に近づく小惑星は、直径が約340mと大きいですが、その10分の1の大きさの小惑星が地球に衝突すると、都市に大きな被害を及ぼすことが、過去の事例（例

例えば平成 25 (2013) 年 2 月 15 日のロシアのチェリャビンスクに落下した小惑星は直径 20m 弱でしたが、街に様々な被害を出しました。) 数十m サイズの小惑星の落下頻度は、数十年から 100 年に 1 度なので、小惑星の衝突による地球への脅威はすごく身近なものなのです。」と。

次いで、今回のミッションを端的に言い切った。

「プラネタリーディフェンス (和訳すると地球防衛) ミッションです」と。また「このミッションは、サイエンスフィクションをサイエンスファクトにと私はよく言うのですが、映画やドラマで空想の世界を描いていたものが実現する象徴でもあります」と。

今回何を知り、未来へ何を備えるのか。地球防衛は、もはや映画ではない事実だ。キャンパスで学ぶ学生の手が、PERC で積み重ねられた知見が、将来の地球を守るための一歩となるのだ。

民間だから迅速に動ける 今必要な知見を今取りに行く力

歴史に残る新しい探査とは何かについて、明確に答えた。「一言、産学連携による挑戦、民間での宇宙探査です。宇宙機関・国・税金を投入しない。」

その理由について「小惑星が 3 年後に衝突しますとなったときに、例えば宇宙機関なら、提案公募、メーカー選定、国の予算編成、議会承認となります。」「ラピッドレスポンスです。迅速な対応が必要なところは民間にしかできないのです」と。

国費ゆえの手続きは時に迅速な対応に馴染まないのも事実だ。

学生が中心に立つ民間小惑星探査 教育が実戦になる

この挑戦の特筆すべき点は、学生が中心にすることだ。小惑星の調査のための着陸機の開発については、「学生が主体となって 2 機の小型着陸機を開発しています。この着陸機は、2021 年度から始まった高度技術者育成プログラムの学生たちが、これまでに開発してきた 10cm 角 (1 ユニットまたは 1U) のキューブサット (超小型衛星) を

元に設計されています。これまで開発した 4 機の 1U キューブサットはすべてミッションに成功しており、現在は 2U (1U の 2 倍の大きさ) の衛星の開発をしています。プロジェクト・アポフィスの着陸機はさらにその 3 倍、つまり 6 倍のサイズに拡張しているので、彼らとしてもホップステップ、もうジャンプどころじゃない挑戦なのです。学生たちは、高度技術者育成プログラムで地球を周回する衛星の開発を経験し、今度は月よりも遠い小惑星への着陸機の開発に挑んでいます。このプロジェクトを通して、学生たちは宇宙企業の技術者に匹敵する技術と知見を持つまでに成長すると期待しています」と言葉に力を込めた。

学生は見学者ではない。自分たちが積み上げた経験をもとに、小惑星へ向かう着陸機に挑む。キャンパスでの学びは地球防衛を担う民間小惑星探査に直結しているのだ。

空想を現実に変える大学 未来の学生への約束

最後に、現在、そして未来の学生に向けてこう話した。

「今回のプロジェクト・アポフィスを契機に、本学が主体となって企業と連携して、月、そして火星にも探査機を送る挑戦は続いていきます。これらのプロジェクトを通して、人類の持続可能性を左右する地球防衛や人類の宇宙への活動領域拡大に直結する技術や知見を本学で学び、習得していかれることでしょう。そしてその学生たちは日本の宇宙産業の発展を支える技術者となったり、宇宙スタートアップ企業を立ち上げるかもしれない。オール千葉工大で宇宙への新しい挑戦ができればとワクワクしています」と。

明年 4 月には、新たに宇宙・半導体工学部も設置される予定だ。宇宙に関わる人材がこれからも陸続と輩出される。そして、歴史的快挙の最初のページにはオール千葉工大と学生たちの名が刻まれることになるのである。

三菱電機と千葉工業大学が 国産フィジカル AI の研究開発に 関する基本協定を締結



左から 三菱電機 執行役副社長
兼 CTO 加賀 邦彦氏、
古田 貴之 所長

千葉工業大学と三菱電機株式会社は5月26日、国産フィジカル AI の研究開発に関する基本協定を締結した。両者は新たに共創センターを設立し、人型ロボットや多脚歩行ロボット、ドローンなどを活用した「AI ロボティクスソリューション」の事業化を推進する。協定期間は令和11（2029）年4月までの3年間で予定している。

近年、労働人口の減少や社会インフラの老朽化を背景に、自動化や省人化への期待が高まっている。一方で、製造現場や保守・点検作業では、周囲の状況に応じた柔軟な判断や繊細な動作が求められ、自律化が難しい領域も多い。こうした課題の解決に向け、現実世界の状況を理解しながら適切に行動するフィジカル AI が注目されている。

本協定では、三菱電機が保有する製造やインフ

ラ保守に関する知見、モーション制御技術やセンシング技術と、未来ロボット技術研究センター（fuRo）が培ってきた大規模物理モデル技術や自律制御ロボット技術を融合し、官需・民需の双方で活用可能な次世代ロボットシステムの開発を進める。将来的には災害対応や物流分野などへの展開も視野に入れている。

fuRo の古田所長は、「ロボットが『デモ』ツールから真に役に立つ技術となるよう、両者の強みを活かし、人の能力を超える次世代フィジカル AI の研究開発、イノベーションサイクルの高速化を行い、新産業創出を力強く進めていく」とコメントしている。

令和9（2027）年度入試説明会

143校145名が出席

高校教員を対象とした入試説明会を、6月2日に津田沼キャンパス、6月5日に東京スカイツリータウン®キャンパスで開催した。

当日は、大川茂樹入試委員長（副学長・未来ロボティクス学科教授）が、本学の教育・研究活動に関する最新の取り組みやトピックス、令和9年度入学者選抜の概要を説明した。

また、令和9（2027）年度に設置予定の宇宙・半導体工学部について、菅洋志教授（宇宙・半導体工学科）は「本学が機械系分野で培ってきた教育・研究実績を基盤に、最先端の宇宙機開発や半導体開発手法や先進機械分野の研究開発にも挑戦できる学部」と紹介した。

続いて、出水雄祐入試広報部次長が、入試制度の変更点や各選抜区分の特徴、昨年度入試結果の分析を解説した。あわせて、総合型（創造）選抜、



令和9（2027）年度入試説明会の様子

学校推薦型選抜、大学入学共通テスト利用入学試験、大学独自入学試験の要点と受験生支援の取り組みも案内した。

本説明会は、高校の進路指導担当教員の本学への理解を深めるとともに、高校との連携強化を図る機会となっている。今後も高校現場との情報共有を進め、受験生一人ひとりの進路選択を支援していく。

令和8（2026）年度同窓会通常総会

5月30日に開催された総会では、この1年間に逝去した同窓生へ黙祷を捧げた後、岩館和己同窓会長（電子工学科 S51 年卒）が挨拶し、昨年度の活動への協力に謝意を示すとともに、支部活動や11月21日開催予定の「同窓生10万人突破記念祝賀会」への参加を呼びかけた。

会則に基づく定足数を満たしていることを確認し、片岡真人氏（建築学科 H10 年卒）を議長に選出した。

議案審議では、令和7年度事業報告、収支決算報告、監査報告を行い、すべて承認された。また、令和8年度役員案、事業計画案、収支予算案についても承認された。

今年度は、支部活動の活性化、若手卒業生の参加促進、学生支援の充実に取り組む。あわせて、同窓生10万人突破記念事業として、11月21日に東武ホテルレバント東京で祝賀会を開催する。

総会終了後には懇親会が開催され、瀬戸熊 修理事長も出席し、全国の支部長が活動状況や課題について意見を交わした。最後は鈴木海渡さん（生命環境科学科 H28 年卒）のリードで校歌を斉唱し、世代を超えた同窓の絆を深めた。



令和8（2026）年度同窓会総会の様子

第60回成田山詣行脚に344名参加



津田沼キャンパスから成田山新勝寺へ 雨にも負けず

体育会本部主催の第60回成田山詣行脚が5月23日から24日にかけて行われ、学生・教職員344名が参加した。参加者は津田沼キャンパスを出発し、成田山新勝寺を目指して約40キロの道のりに挑んだ。

この行事は体力・精神力の向上や参加者同士の親睦、無病息災の祈願を目的として、今年は60回の佳節を迎えた。

当日は、同窓会ならしの支部が出発式に駆けつけた。参加者は23日19時30分に津田沼キャンパスを出発し、途中2回の休憩を挟みながら24日6時15分に成田山新勝寺へ到着した。道中では雨も降ったが、互いに励まし合いながら多くの参加者が最後まで歩き抜いた。

到着後は瀬戸熊修 理事長をはじめ役員・教職

員や同窓会成田支部の出迎えを受け、参加者は達成感に包まれた。

参加した体育会会長の平山真衣さん（創造工学部デザイン科学科4年）は、「あいにくの雨での行脚となりましたが、辛いときこそ声を掛け合い一歩一歩進むなかで参加者同士の絆が生まれたと感じています。皆が互いに励まし合い、無事に完歩できたことを心から嬉しく思います。また第60回となる成田山詣行脚を成功に導けたことは、私にとっても深く心に残るかけがえのない経験となりました。支えてくださった同窓会の皆様、教職員の皆様、そして最後まで諦めずに歩ききった参加者の皆様に深く感謝申し上げます。」と振り返った。



成田山新勝寺大本堂での全体写真



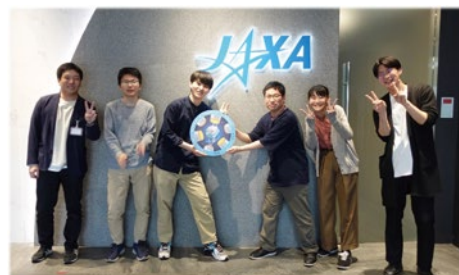
ゴールまであと少し



本イベントを主催した
体育会本部メンバー

小澤研究室が参画した宇宙材料研究が NASA 年次ハイライトで紹介

先端材料工学科・小澤俊平研究室が参画した JAXA の宇宙実験プロジェクト「Thermophysical Properties Measurements of Non-Equilibrium Molten Alloys for Design of Thermal Storage Material (ELF-Thermal Storage)」が、NASA が発行する「International Space Station Annual Highlights of Results2025」において、国際宇宙ステーション (ISS) で得られた代表的な研究成果の一つとして紹介。



宇宙実験実施日に JAXA 管制室前での研究室の学生

NASA 年次ハイライトは、ISS で実施された研究成果の中から、生命科学、宇宙科学、物理科学、技術開発などの分野における注目すべき成果を取り上げる年次報告書として令和 8 (2026) 年 5 月 21 日公開された。2025 年版では、物理科学分野の研究成果として、ISS の日本実験棟「きぼう」に搭載された静電浮遊炉 (ELF) を用いた熱エネルギー貯蔵材料に関する研究が掲載された。

小澤研究室では、高温で溶けた金属や合金の密度、表面張力、粘度などの「熱物性」について研究している。中でも、宇宙の無重力環境や、試料を容器に触れさせずに浮かせて融解・凝固させる浮遊プロセスを活用した取り組みでは、対流や容器からの汚染の影響を排除した正確な測定を実現している。

今回紹介された研究では、鉄-銅合金の熔融状態における熱物性データを ISS の無重力環境で測定し、高温蓄熱材料の設計・開発に必要な基礎データを取得した。

蓄熱材料は、太陽熱や工場排熱などを蓄え、必要ときに利用する技術を支える重要な材料のひとつであり、再生可能エネルギーの利用拡大や未利用熱の有効活用を支える技術として、近年その重要性が高まっている。併せてエネルギー消費量や二酸化炭素排出量の削減にもつながることが

ら、持続可能な社会の実現に向けた基盤技術として期待されている。さらに地上の再生可能エネルギー利用だけではなく、宇宙機や将来の宇宙ステーションにおけるエネルギー管理への貢献にも期待が高い。

本成果は、国際学術誌 ISIJ International に掲載された論文に基づくもので、筆頭著者は小澤研究室で博士号を取得し、現在は学習院大学の研究員として活躍している清宮優作博士だ。本学で育成された若手研究者の成果が、ISS を利用した材料研究の国際的な成果として紹介されたことは、本学の教育研究活動の広がりを示すとともに、研究力と人材育成の実績を広く発信するものだ。

小澤研究室では、今後も無重力環境や浮遊プロセスを活用して材料開発や製造プロセスの高度化を進め、省エネルギー化や持続可能な社会の実現に貢献することを目指している。



第 1 著者の清宮優作博士が本研究成果発表した際の記念撮影
左から、小澤俊平教授、毛利衛宇宙飛行士、清宮優作博士

学生たちの実測が支えた受賞

若山尚之（わかやま・ひさし）教授ら、空気調和・衛生工学会「第40回振興賞技術振興賞」を受賞

ちばぎん本店ビルで続いた静かな努力の証

創造工学部建築学科 若山尚之（わかやま・ひさし）教授らが、公益社団法人空気調和・衛生工学会の「第40回振興賞技術振興賞」を5月14日に受賞した。

受賞の舞台となったのは、地元千葉に新築された、ちばぎん本店ビル。竣工後の省エネルギー性や快適性を評価する取り組みに光が射した。

若山教授は「一つ一つ、学生と研究を積み重ね、結果的に受賞となった」と語る。その背景には、数年にわたり現場へ通った学生たちへの深い思いがあった。目立たない作業を正確に丁寧に続けた学生の時間がこの受賞の土台なのだ。



創造工学部 建築学科 若山 尚之 教授

学生の手による実測が建物の価値を明らかに

今回の若山教授の役割は、竣工後の建物の「快適さ・環境配慮性能」を実測や数値解析の面から評価することだ。「今回、設計は私、全く関係ないです」と語る。ちばぎん本店ビルについては「省エネ性が高く、働いている人たちが快適に過ごせるオフィスでしたが、実測データを基に評価を行い、より高いレベルへチューニングしました」と説明する。

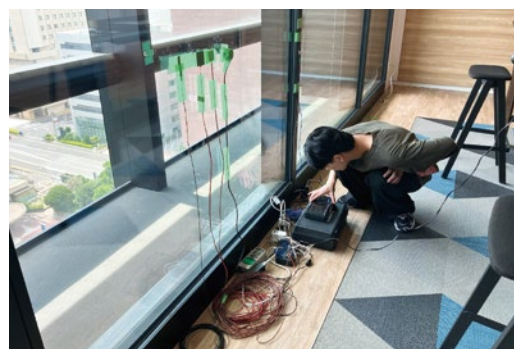
その評価を支えたのが学生たちである。夏と冬に度々現場へ行き、温湿度計を建物内に設置・回収し、データを吸い上げる。置く位置や高さ、勤務中の行員への配慮も含めて、すべてが大切な研究となった。それが4年生にとっては卒業研究となり、修士学生にとっては検証と解析を深める場にもなった。「現地作業は学生たちが頑張ってくれた」と振り返る。

地域への還元が次の一歩

調査は令和4（2022）年から始まり、今年で5年目に入った。学生たちにとって、それは賞の

ためではなく、自分の研究に真正面から向き合う現場であった。受賞は終点ではなく、「調査を進めると、また新たなテーマが見つかる」と語る、次の研究への入口でもある。併せて「今回の調査研究は、設計会社だけでは到底できなかった」とも話す。だからこそ、学生たちの現地作業は大きな意味を持つ。見えない温度や湿度を測り続けることが、建物の価値を社会に示す力になったのである。小さな測定器を設置する手が、受賞への道をつくった。

受賞後の展開については「大学の本分は地元還元すること」と語る。ちばぎん本店ビルで得た知見を、地域に生かす道を見据えている。地元の建物を測った経験が、またひとつ、地元を支える知になる。



南西面のサッシにセンサー類を設置する学生

見方が変われば、世界は変わる

『橋をデザインする』が結んだ、 八馬智（はちま・さとし）教授の長い旅

創造工学部デザイン科学科 八馬智教授が共著者として執筆した『橋をデザインする』が土木学会出版文化賞を6月12日に受賞した。これは、消費財のデザインへの違和感から橋へ、土木へ、都市鑑賞へと歩んできた人生旅が、あたかも一本の橋のように結ばれた軌跡だった。



創造工学部 デザイン科学科 八馬 智 教授

消費されないデザインへ

出発点は、学生時代のデザインの学びであった。車やプロダクトデザインに惹かれたが、学ぶほどに胸に問いが生まれた。「消費を促すためのデザインって何だろうって思っていた。」

恩師の杉山先生からインフラである“橋のデザイン”という世界を知った瞬間、視界が変わった。「橋ってデザインの対象なのだという衝撃でした。」

橋は消費される商品ではない。街に残り、人の暮らしを支える。そこに、教授が探していたデザインがあった。「地図に残る仕事がやりたかった」と語る。

風景の話をするという仕事

大学院修了後、北海道の建設コンサルタントへ勤務。ほぼエンジニアだけの環境で、安全や構造、コストや維持管理などの厳密なルールの先にある問いを語り続けた。「だけど、こっちは風景の話をしたいわけですよ」そして「デザインはちゃんとコストも考えてのデザインですよ。維持管理も考えてのデザインですから」と考えていた。理解されないこともあった。それでも、納得の輪を広げるひと手間の先にこそ価値があると信じた。

日常の中に絶景を見つける

千葉工業大学へ至る道の節目には、いつも人の縁があった。「だから結局人の縁」、転機は「工場萌え」という書籍・関係者との出逢い。そこから土木構造物である工場が、“眺める”いわばデザ

インの対象になったように、橋も、水門も、街角の設備も、「見方によって見え方が変わる、日常の絶景」であることに気づき、そこに関わる人々の価値観まで変え行く力があるとの確信につながった。

橋の本が架けた橋

『橋をデザインする』には、北海道勤務時代に、バイトで入ってきて、のちに若くして亡くなった増淵基さんへの思いがある。日本の橋梁界を担うと期待された人物で能力もあるし、人望もあった。「そのお子さんへの育英資金となるよう作った本」なので、今回の受賞は、追悼であり、祈りであり、教授自身の長い時間への区切りでもあった。「僕の中では、本当にちっぽけな僕の個人的話ですけども、すっきりしました。すっごく。」

橋の向こうにあるもの

今後について「今度はものの見方を鍛えるためのトレーニング本を作ろうと思ってます。要するにセンスは鍛えられる。デザインのための筋トレをやるみたいな、そういうことですね」と語る。「ラッキーですよ。人に恵まれてるっていうのは、これは間違いなく」そして「縁が大事だと」。

これまでの歩みは、橋の物語である。土木とデザインを結び、過去と未来を結び、失われた人の思いと若者を結ぶ。その橋は、読む者の胸にも静かに残る。そのまなざしは、学生がいつもの街を見直すための、小さくも確かな灯りとなる。世界を変える入口は、いつも日常の中の絶景にある。

一つの検体から、 未来の希望をひらく



Nature group Scientific Reports に現在掲載されている論文表紙
<https://www.nature.com/articles/s41598-026-54312-7>

先進工学研究科生命科学専攻 赤城紫音（あかぎ・しおん）さん博士課程2年、アルツハイマー病の早期発見につながる可能性を示す研究成果がインパクトファクター Q1 の Scientific Reports に掲載

アルツハイマー病を、もっと早く見つけられないか。その問いに向き合い続けた研究成果が、Q1 と呼ばれるインパクトファクター上位グループの国際学術誌 Nature group Scientific Reports へ5月21日に掲載された。筆頭著者として論文に名を連ねたのは、先進工学研究科生命科学専攻博士課程2年の赤城さんである。

便検体から腸内細菌の変化とポリアミンの変化を読み取り、アルツハイマー病の病態を診断するマーカーとして利用できる可能性を探る試みだ。治療へ向かう研究がある一方で、赤城さんが見つめたのは、病を早く見つけるための入口だった。

同じ病へ立ち向かう。 別の道からのアプローチ。

赤城さんが所属する南澤研究室のテーマは、アルツハイマー病にどう向き合うかである。赤城さんたち学生の研究も、その大きな方向と切り離されたものではない。「先生と目指す方向は一緒なんですけど」という赤城さんの今回の論文は治療法そのものではなく、「早期発見したり、その診断するマーカーとして、利用できる方法がないか」という視点、それは病が進行する前にその「兆し」を便検体から読み取るための一歩となった。

腸内細菌とポリアミンを 合わせて観る

研究の鍵となるのはポリアミンという物質である。ポリアミンは、私たち自身の体の中でも作ら

れ、腸内細菌によっても作られ、アルツハイマー病との関連が近年注目されている。赤城さんは、体内で起こる変化と菌が生み出す変化を同時に見ようとした。いわば「ポリアミンの変化と菌の変化の2つを一緒に手に入れる」この視点は、病の姿を一つの臓器だけで捉えないという姿勢でもある。脳だけを観るのではなく、腸だけを観るのでもなく同時に見つめること。それが一つの便検体から腸内細菌のDNAとポリアミンの情報を同時に得る方法の検討につながった。

そして「1個のサンプルから2つの情報が同時に取れた」その結果、アルツハイマー病モデルマウスと病態を起こさないマウスの間で、便中のポリアミン量と腸内細菌の組成に違いが見られた。それがアルツハイマー病の早期発見につながる未来へ開かれた確かな入口となったのである。

知の自由が開いた扉

現実的な課題もあった。小さなマウスから得られる検体量には限りがあり、飼育にもコストがかかる。ゆえに限られた材料を無駄にせず、一つの検体からより多くの情報を得る。その切実な工夫も研究の発想を生んだ。

この研究の背景には研究室ならではの空気がある。自らを「素人集団」と表現し「ある意味、教科書的な概念はなく、自分で考えて没頭できる知の自由」が大切にされていた。

受け継がれたバトン

今回の論文はゴールではなく始まりだという。「この扉をこじ開けなきゃいけない」と語る。

アルツハイマー病は本人だけでなく、家族の記憶、生活、時間も大きく変えてしまう病でもある。だからこそ、研究の先にあるのは、その病を前にした人が、少しでも早く確かに次の一步を選べる未来である。

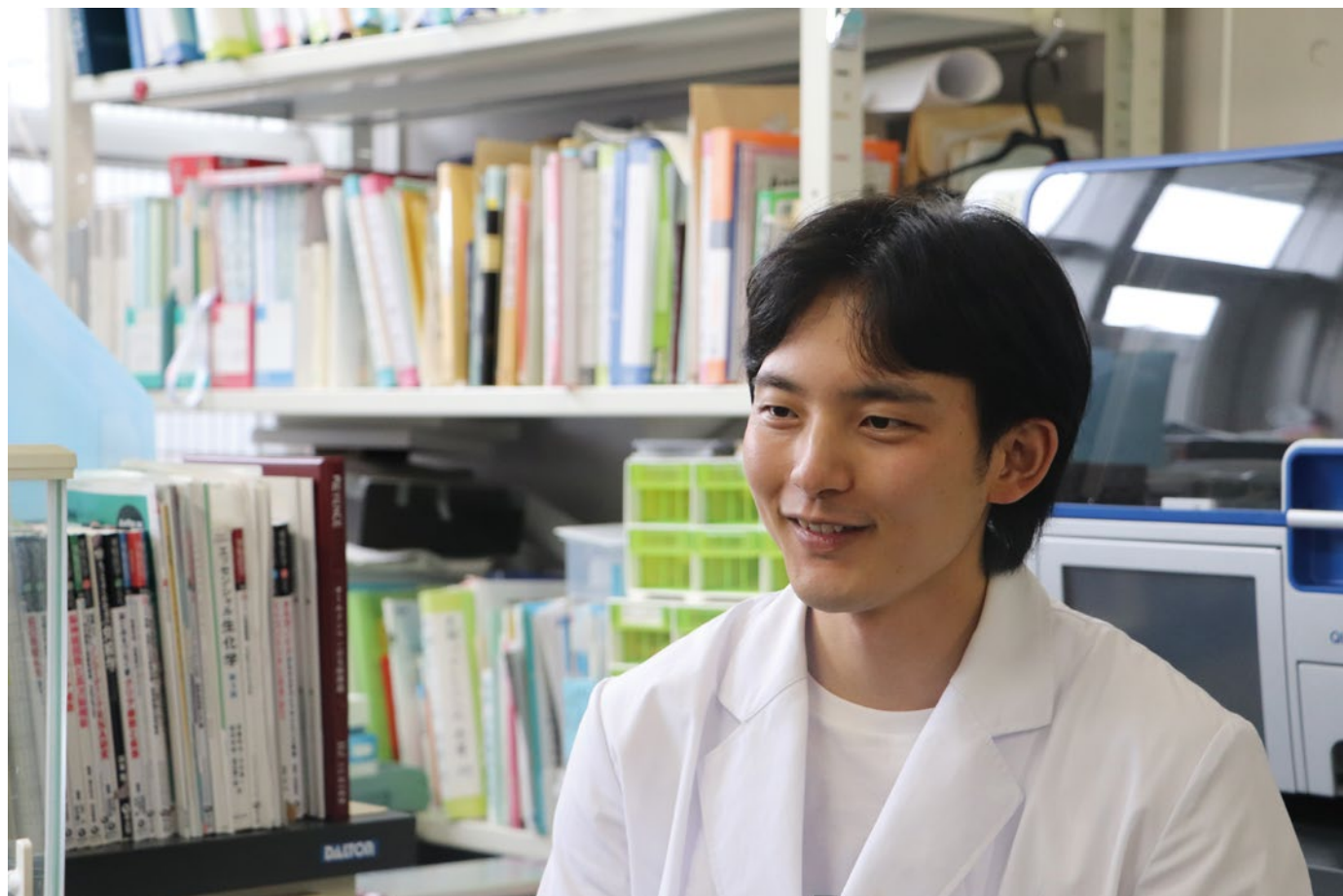
「治ればいいです。治ればいいです。アルツハイマーだって治ればいいんです。」

赤城さんは、この成果を自分ひとりのものとして語らない。「先輩から続いてきたものが形になって、やらせていただいた」という。

この記事で何を伝えたいかを尋ねると、返ってきたのは感謝の言葉だった。

『『おかげさまで』が伝われば一番嬉しいかなと』卒業した先輩、同期、後輩、研究室の外で支えてくれた人たち。日々の実験の中で、その存在が支えになっていたという。筆頭著者として国際誌に掲載される。その出来事だけを見れば、華やかな成果に見える。しかし、その足元には、名前が大きく出ることのない多くの手がある。赤城さんが何より伝えたかったのは、その人たちへの「ありがとう」であった。

研究室の中で重ねられた小さな実験が、いつか誰かの記憶を守るかもしれない。未来へ向けて、最初の扉が開いた。未来への希望は、ここから始まる。



先進工学研究科生命科学専攻 赤城紫音さん 博士課程2年

就職・進路支援便り

3年生・4年生の「国内インターン」単位認定についての確認

「国内インターン」の単位認定申請を予定している方は、インターンシップガイダンスやメール配信の内容を改めて確認し、以下条件をすべて期間内に満たしてください。「国内インターン」は、単位認定を希望し、条件を満たすことにより単位付与されます。提出が遅れると、単位が付与できないこともあります。メール配信等でお知らせしている提出締切を厳守し、各自責任を持って申請してください。なお、各学科で指定の提出方法がある場合は、学科の指示に従ってください。不明な点は就職・進路支援部へ問い合わせてください。

※インターンシップ取り扱い変更（文部科学省・厚生労働省・経済産業省の合意による「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」（3省合意））に基づき、「国内インターン」シラバス記載の通り、単位認定は学部3年生以降となります。学部2年生以下で各種講座への参加希望や単位認定について質問等がある方は、就職・進路支援部へ問い合わせてください。

「国内インターン」単位認定条件

- ① 「準備講座」「マナー講座」「報告会」それぞれに出席し、就職システムに報告を入力。
- ② インターンシップ先が決定次第「届出書」を就職システムに入力し、5日間以上（午前午後の丸1日の体験がある内容で5日間以上）の就業体験をする。複数社合算は不可。
- ③ 実習終了後、「実習報告書」を就職システムにアップロード。裏面の企業コメントおよび企業押印が必須のため、実習最終日に持参して作成いただく事をお勧めします。

全学生向け支援

5月に対面およびオンラインで実施した「オープン・カンパニー」では、各業界を代表する企業約50社が参加し、2日間合計でのべ3,000名の学生参加数となりました。業界や個社について企業採用担当者のお話を直接聞ける、良い機会となったのではないのでしょうか。

なお、6/20（土）には「モノづくり業界 まるわかりイベント」を実施しました。参加学生は積極的に企業の話に耳を傾けメモを取っていました。

今後も学内でのイベントを有効活用し、進路に役立ててください。



受賞者紹介

受賞おめでとうございます!



国立研究開発法人
宇宙航空研究開発機構 (JAXA)
宇宙戦略基金の技術開発テーマ
『SX-CRANE』に採択

「ユビキタスな自律移動社会を支える
次世代 PNT 技術開発」

すずき たろう
鈴木 太郎 教授

先進工学部・
未来ロボティクス学科

受賞日
2026.6.9

詳細は
コチラ >>>



AIP Publishing
論文誌にて Featured Article
および Scilight に選出

Applied Physics Letters・
Raman-integrated scanning
electrochemical cell microscopy for
operando localized
spectroelectrochemistry

たちざき えいた
立崎 瑛太 さん

電気電子工学専攻 修士 1 年
熊谷明哉研究室

受賞日
2026.4.22

詳細は
コチラ >>>



トウキョウ建築コレクション
2026
全国修士設計展 名和研二賞

菌糸建築
菌糸と共に生きる世界をめざして

いとう しゅんき
伊藤 舜起 さん

建築学専攻 修士 2 年
遠藤政樹研究室

受賞日
2026.3.7

詳細は
コチラ >>>



トウキョウ建築コレクション
2026
全国修士設計展 保坂猛賞

器用人たちの住処

いのまた かえで
猪股 楓 さん

建築学専攻 修士 2 年
今村創平研究室

受賞日
2026.3.7

詳細は
コチラ >>>



公益財団法人マザック財団
優秀論文賞

Precision Milling of Microstructures
on Soft Rubber Materials

あおやぎ あすか
青柳 明日華 さん

機械工学専攻 修士
瀧野日出雄研究室

受賞日
2026.5.26
在学中の業績が評価され、
卒業後に受賞

詳細は
コチラ >>>



一般社団法人 電気学会
令和 7 年優秀論文発表賞
(A 部門大会)

サイズの異なる複数電極を用いた
誘電体形状判別に関する検討

さだすえ ようすけ
貞末 洋佑 さん

電気電子工学専攻 修士
相知政司研究室

受賞日
2026.4.2
在学中の業績が評価され、
卒業後に受賞

詳細は
コチラ >>>



所属・学年は受賞当時のものです。

体育会柔道部、59年ぶりの 全日本学生柔道優勝大会で健闘

佐野健太主将が大田区春季大会で優勝、 小輪瀬祐希人（こわせ・ゆきと）選手は 全日本理工科個人戦で3位



第75回全日本学生柔道優勝大会（日本武道館）

体育会柔道部が、春から初夏にかけて個人・団体の両面で大きな成果をあげた。5月17日（日）、第79回大田区春季柔道大会（主催：大田区）が大田区大森スポーツセンターで開催され、主将の佐野健太選手（先進工学部 知能メディア工学科3年）は、有段者軽量級の部（75kg以下）で優勝した。佐野選手は緒戦を技ありで制した後、決勝を含む3試合をすべて一本勝ちとする完璧な内容で勝ち上がった。「さらに稽古を重ね関東学生2部優勝（全日本学生柔道優勝大会出場権獲得）を目指します」と語った。

その2週間後の5月31日（日）、2026年度第73回関東学生柔道優勝大会が埼玉県立武道館（上尾市）で開催された。体育会柔道部は13校が参加した同大会2部で準優勝し、6月27日（土）に日本武道館で開催される2026年度第75回全日本学生柔道優勝大会への出場権を獲得した。全日本学生への出場は、昭和42年の優勝以来、実に59年ぶりである。この大会では千葉大学を6対1、神奈川大学を4対1、関東学園大学を4対2で破って決勝に進出。防衛大学校には1対5で敗れたが、佐野主将は「目標の一つ目は達成できたので素直に喜びたい」と語った。

迎えた6月27日（土）の2026年度第75回

全日本学生柔道優勝大会（団体7人制）では、抽選により2回戦からの登場となり大阪体育大学に1対5で敗れた。翌28日（日）の第67回全日本理工科学生柔道優勝大会（団体5人制）では、3連覇を目指して臨んだものの2回戦で第一工科大学に敗れ夢は潰えた。選手5人の平均体重は本学84.4kgに対し第一工科109kgであった。また、同大会個人戦無段の部では小輪瀬祐希人選手（情報変革科学部 情報工学科1年）が第3位に入賞した。59年ぶりに全国の豊を踏んだ経験と、連日の大会で得た手応えは、今後の柔道部にとって大きな財産となる。



主将 佐野健太さん
第79回大田区春季柔道大会
優勝



小輪瀬祐希人さん
全日本理工科学生柔道優勝
大会 個人戦無段の部 3位

Chiba Tech News ご愛読の皆様へ

～デジタル版とA4判（見開きA3判）へ移行のお知らせ～
入試広報部

Chiba Tech News は
先月号より全面デジタル化、
今月号よりお手元で印刷可能な
A4判（見開きA3判）となりました。

今後も冊子での送付をご希望される場合は、下記のいずれかの方法にて、
入試広報部までお申込みいただけますようお願い申し上げます。

千葉工業大学 入試広報部

① 電話：047-478-0222

② メール：cit@chibatech.ac.jp

③ QRコード ※送付先のお名前・ご住所とご子女のお名前・学生番号をお知らせ下さい。



これからも Chiba Tech News をご愛顧いただけますようお願い申し上げます。